

# 「雲の使」と「鳥の使」と

— 古代文芸における距離感と媒介物の発想 —

青 木 敦

## 一、はじめに

天飛ぶ鳥も使ぞ鶴が音の聞えむ時はわが名問はさね

(古事記)

み空ゆく雲も使と人は言へど家づとやらむたづき知らずも

(万葉集)

「天飛ぶ」の歌は、古事記によれば、允恭帝の皇子木梨の軽の太子が、罪を得て伊余の湯に流された時の歌と伝えられており、また「み空ゆく」の歌は、天平勝宝七年二月、当時兵部少輔であった大伴家持が、防人の悲別の情を詠んだという歌の中の一首である。いずれの歌も、遙かなる距離感を踏まえつつ、前者は流罪の心情を、後者は防人の遠旅の客愁を、それぞれ空ゆく「鳥」と「雲」に託してうたい上げているが、この二つの古代歌謡に見られる「鳥の使」と「雲の使」という相似の文芸想念は、決して偶然の近似ではなくて、むしろ本質的には共通の発想圏内にあるのではないかとさえ考えられる。

罪を得て放たれ、その流謫の地にあつて、あるいはまた、遠い旅路や他郷の地にあつて、遙かな故郷を慕い肉親を恋うて切切と詠んだ歌の一

「雲の使」と「鳥の使」と

群が、わが文学史上に妖しい光を添えている。そして、これからここで考察しようとするのは、それら鬮旅の文学や流人の歌に共通するいわゆる「距離感の文芸」の性格と、それらの系列の中において、冒頭の古代歌謡に象徴的に表われている「雲」や「鳥」の素材が、どのような必然的関連性をもって考えられるか、ということなのである。

## 二、「雲」に象徴された距離感と神秘感

天雲の遠隔の極遠けども情し行けば恋ふるものかも

(万葉集 巻四)

はろばろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は

(同 巻五)

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早くいたらむ歩め黒駒

(同 巻七)

古き代の人人にとって、山なみの起伏し続ける地平の遠さも、あるいは見遙かす海原の水平線も、あの青雲の向伏す天空の果てしない想いには及ばなかったであろう。「わたつみの国」や「根の底つ国」に比べて

「高天原」に優位を占めさせた古代人の、それは鋭い直観力でもあった。そして、無涯の蒼穹と、その下に摺伏する大地とのその中間にあつて、遙かな中空を浮遊し漂泊する「雲」というものが、古き文芸の世界の中で、ある特異な扱いをもって受けとめられ描かれていることに気づいてくる。それは、時として、悠悠たる団雲であつたり、連なり続く層雲であつたり、黒げな乱雲であつたり、また峰にかかる豊旗雲であつたりする。が、いずれにしても、上代の伝承や歌謡をひもどく時、遠き日にこの国土の山河の上を漂い去来したこれらの「雲」についての古き祖たちのナイーブな抒情が、その豊かな民俗と信仰を綯いませながら静かに伝え続けられてきた跡を見ることが出来る。そこにあつては、「雲」とはまず、遠いものであり、「雲離れ」という言葉にも示されるように、高く遙かな、手の届き及ばぬものでもあつた。そしてそれゆえに、はるばるとした距離感を誘発する最適の素材でもあり、さらに「蒼波路遠雲千里（和漢朗詠集）」というような「遠さ」と「隔たり」の象徴とも考えられていた。「雲井如す」という語が「遠し」にかかる枕詞であるのもその裏づけの一例であろう。そしてこのような距離感はまだ、内的情緒の世界にも導入されて、相聞の心象とも重なり、相い離れた人を恋い慕情を行雲に託した歌は枚挙にいとまがない。

ひさかたの天とぶ雲にありてしか君に相見むおつる日なしに

（万葉集 卷十一）

み空ゆく雲にもがもな今日行きて妹に言問ひ明日帰り来む

（同 卷十四）

夕ぐれは雲のはたてにものぞ思ふあまつ空なる人を恋ふとて  
 こうして、「雲」という素材は、古代の叙事と抒情の世界の中で、具象と抽象とにかかわらず「遠い隔たり」を象徴するのに共通した心象をもって扱われていたのであるが、このような距離感、さらにもう一つの要因、つまり雲の「神秘感」と共鳴し合つて、その文芸効果を一層強調する役割を果たしている。

八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を（古事記）

「八雲立つ」は「出雲」の枕詞とも言われているが、この表現には、群がり立ちこめる密雲を想像させるような、荘重な神秘感とおどろおどろしい呪的な響きがある。また、

蓋大蛇所居之上常有雲氣、（日本書紀 卷一）

など、濛濛と立ちこめ這い上る雲霧のようなものに対する古代人の畏怖の思いが漂っている。そしてそれはまた、神秘なものや聖なる地と「雲」とは、密接不離のつながりをもって考えられていたということでもあつた。こうして、聖地や靈山には常に雲がかかり雲気が立ち昇っているという想念が、大陸外来の浄土や仙界の思想と混淆しつつ、不可欠の条件ともなつて古来の詞章の中に定着する。

五色ノ雲アリ、霓ノ如ク北ニ度レリ。其ヨリシテ其ノ雲ノ道ヲ往クニ、芳シキコト名香ヲ雜フルガ如シ。觀レバ道ノ頭ニ黄金ノ山アリ。

即チ到レバ面ニ炫ク。爰ニ薨リマシシ聖徳太子待チ立チタマフ。共ニ山ノ頂ニ登ル。（日本靈異記 上卷）

神ノ御前ニシテ法華ヲ講ズルニ、紫ノ雲、山ノ峰ノ上ヨリ立チテ、經ヲ説ク庭ヲ覆ヘリ。

(今昔物語 卷十二)

このように見てくると、この「雲」のもつ距離感と神秘感が、そのまま古き「常世」や「異郷」の理念と密着していたのはまた当然のことと言えよう。つまり「雲」は、この世ならぬ世界「常世」そのものの象徴であり、そしてまた、それら異郷からの来訪者をも象徴し暗示するものであった。雲立つところ、そこは現実の世とは異質の神秘感と呪的な違和感に満ちていたのである。記紀等における高天原神話は、いずれにしても「雲の上」の世界の空想的所産に違いないが、天上と下界の間にかかっていたという「天の浮橋」にしても「天孫降臨」の描写にしても、「雲」の要素を欠かすことができない。

故、ここに天の日子番の邇邇芸の命、天の石位を離れ、天の八重多那雲を押し分けて、稜威の道別き道別きて、天の浮橋に浮きじまり、そりたたして、竺紫の日向の高千穂の霊じふる峰に天降りましき。

(古事記 上卷)

皇孫乃チ離チ天磐座ヲ、且排ニ分天八重雲ヲ、……

(日本書紀 卷二)

という神秘壮大な伝承。それはやがて、

大君は神にしませば天雲の雷の上に廬するかも

(万葉集 卷三)

のような古代王朝の神聖観念から「雲の上」の实感を育て、さらには、かきちらし花とのみふる白雪は雲の都の玉の散るかも

(夫木集)

のいわゆる「雲の都」や仙郷の思想と深くかかわり合ってくるのであるが、こうした理念は「雲」のみならず「煙」においても同曲であったの

「雲の使」と「鳥の使」と

を見落すことはできない。古き想念の世界にあっては雲も煙も本質的な差異はなかった。それは、山に立つ煙も野を焼く煙も、そして火葬の煙も香の煙も、さては玉手箱の煙に至るまで、すべてこれ超実在界へのつながりを示すすがだったのである。

### 三、雲の使

こうして、古き代にあっては、「雲」とか「煙」とかいう曖昧する気象は、遙かなる距離をつないで思いを託すことができる「なかだち(媒)」と考えられた。

国遠み思ひなわびそ風のむた雲の行くなす言は通はむ

(万葉集 卷十二)

そして、「み空ゆく雲も使と人は言へど……」のその「雲の使」という想念は、ひいては、「常世」と「この世」との無際涯の距たりを越えて連絡する象徴的な媒介物として信じられたのである。その系譜に属すべき数多い文芸の中で、典型的なものをかの浦島説話の玉手箱の物語に見出すことができる。

……玉くしげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世べに 棚引きぬれば……

(万葉集 卷九)

今年浦島の子は帰れりしなり。もたりし玉の箱をあけたりしかば、紫の雲、西さまへまかりて……

(水鏡)

「玉(霊)の箱」から出た雲とは、そのまま疑いなく「常世」の象徴であって、それが禁呪・霊封の箱から立ち昇って「常世べ」に漂い去って

しまったがゆえに、浦島子が常世で過ごした異郷的時間の呪齡はその靈効を失なってしまうという実に暗示的な伝承であるが、

とこよべに 雲立ちわたる 水の江の 浦島の子が 言持ちわたる

やまとべに 風吹き上げて 雲離れ 退き居りともよ わを忘らすな

とこよべに 雲立ちわたる 玉くしげ はつかに開けし 我ぞ悲しき

(丹後国風土記)

これらの説話や歌謡には、「常世」と「この世」との觀念世界の距離感の接点を「雲」という媒介物に託した古き発想が、いみじくも鮮やかに生きている。そしてまた、

御文不死の葉の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。その

よし承りて兵士どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山をば

ふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へ立ち昇るとぞ言ひ伝

へたる。

(竹取物語)

など、火山の煙が大空へ立ち昇るのにも異郷との関連性を考えていた名残りが濃厚である。火を噴く山、煙吐く峰が、靈界とのつながりをもち、それを象徴する聖なる山・靈山とも考えられていたことは、その峰にかかる「雲」の連想に溶けこみ、

燎ゆる火を 雪もて消ち 降る雪を 火もて消ちつつ 言ひもかね

名づけも知らに 靈しくも 坐す神かも……

(万葉集 卷三)

という叙景にまで浸透する。

そして、これらの想念はさらに具象化して、常世からの来訪者や神靈

が、雲に乗り煙の中に隠顕するという伝承に密着する。

雲霧をふみ渉り、遠くより来参たり。(古事記 上卷)

即ち白雲に乗りて、蒼天に還り昇りましき。(常陸国風土記)

女 羽衣をとり、雲にのりて去りぬ。(駿河国風土記)

大空より、人、雲に乗りており来て……(竹取物語)

其ノ時ニ雲ノ中ニ仏現ハレ給フ。(今昔物語 卷十一)

白露のおくと見しまに彥星の雲の舟にも乗りにけるかな(宇津保物語)

つまり、「雲」は、天空を翔け渡る神靈を運ぶ聖なる「のりもの」として考えられていたのであるが、このような想念に裏つけられた説話描写は、わが国のみならずほぼ世界的な分布を見せて拡がっている。今それ

らの子細に引証する余裕はないが、中国・インドをはじめとするアジア大陸からバビロン・ギリシアなどの神話・伝承、さらには壮大な北歐神話伝説等に至るまで、いずれも神は天空に在って雲を乗り物とするという思想が普遍的である。

こうして、雲を靈的な媒体とする思念は、ひいては空に立つ煙霧への不可思議なまでの連想に昇華しつつ、挽歌に至って激しく昂るかのようである。

今城なる小山が上に雲だにも著しく立たば何か嘆かむ(日本書紀)

直の逢は逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ俣ばむ

(万葉集 卷二)

隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ

(同 卷三)

昨日こそ君はありしか思はぬに浜松の上に雲と棚引く(同 卷三)

ま幸くと言ひてしものを白雲に立ち棚引くと聞けば悲しも

(同 卷十七)

「雲隠る」という想いは実感であった。

百伝ふ警余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(万葉集 卷三)

見し人の煙を雲と眺むれば夕の空もむつまじきかな (源氏物語)

など、死霊と煙との関連は必ずしも「雲煙となす」という火葬の習俗からの発想ばかりではない。もちろん、火葬の煙を直接の契機にしながらもなお、死者の魂魄が煙に乗って天空の霊界へ去ると信じた古代の人人の心意が、そのまま煙そのものをあくがる魂と見て、亡き人を憶うとり返しのつかぬ想いを消えゆく煙に託したかのである。鳥辺山や仇し野などの火葬の煙が文学に採り入れられるようになるそのずっと昔から、死霊と煙との連想は長い歴史をもって漂い続けてきたのである。こうして、たなびきたゆたう古き「煙」の想いは、今に残る多くの火祭りの行事に伝わり、あるいは流れて仏教化した加持の護摩の法煙にこもり、縷縷として浄土を念う香煙にも同化し、やがて鼻観三昧の聞香のすさびから香道の流れともなっていたのであろう。

#### 四、鳥の使

ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲井か

はつかりは恋しき人のつらなれや旅の空とぶ声の悲しき

ふる里をいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね

恋ひわびてなく音にまがふ浦浪はおもふかたより風や吹くらむ

「雲の使」と「鳥の使」と

(源氏物語 須磨)

みずから身を引いたとはいえ、光源氏が須磨に下ったのは典型的な「配流」の姿であったと見ることが出来る。源氏はここで流謫の身をかこち嘆く幾つかの歌を詠んでいるが、いずれも遙か隔たったふるさと京都や、遠く恋しい人と自分との間に、何らかの通う想いがあれかしとの願望や予期を、雲や風や雁に託してうたった謫中歌である。しかし、かかる発想法は決して紫女のみ独創であるわけではなく、むしろこのような類型は、冒頭に引いた古代歌謡にも見られるように、古来、遠旅や配流に伴った詩歌に共通のものであったはずであり、その後世的隴化表現とも見られる説話や歌謡が、かなり大きな水脈をなしてわが文学史の中に流れていることに気づくのである。前節までは「雲」についての距離感と「雲の使」という古き想念について考えてきたのであるが、この節では、それと同心円上にあると思われる「鳥の使」についてさらに考察を進めてみたい。

天飛ぶや鳥にもがもや京まで送り申して飛び帰るもの(万葉集 卷五)  
あけくれの朝霧かくり鳴きてゆく雁はわが恋を妹に告げこそ

(同 卷十)

天飛ぶや雁を使に得てしかも奈良の都に言告げやらむ(同 卷十五)  
果てしない天空をどこまでも飛翔し続けて行く「鳥」に対しての古代人の遙かなる憧憬と神秘感は、「雲」に抱いたそれよりもさらに具象的な「鳥の使」という現実の期待感を育てていった。それは

天子射<sub>ニ</sub>上林中<sub>ニ</sub>得<sub>レ</sub>雁、足有<sub>レ</sub>係<sub>ニ</sub>帛書<sub>一</sub>。(漢書 蘇武伝)

という古き大陸に伝えられた漢の蘇武の雁帛の故事を引くまでもなく、隔絶した距なりに絶望した古代の人たちの切なる願望と祈りでもあったろう。古き「神語」、即ち神の託宣とも言われる八千矛の神の歌の中の「あまはせづかひ」という言葉が、海部系統の伝承に深い関連を持つと考えられながらも、その一方で「天馳せ使」の想念を潜在させていたという印象を捨て去ることができない。それだから、たとえば、

天飛む 軽の嬢子 いた泣かば 人知りぬべし 波佐の山の鳩の 下  
泣きに泣く  
(古事記)

天飛む 軽嬢子 したたにも 倚り寝て通れ 軽嬢子ども (同)  
さらには柿本人麻呂が妻の死を悲しんで詠んだ長歌

天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里にしあれば…… (万葉集 卷二)  
などの歌における「天飛む」は、ふつう「軽」にかかる枕詞であり、同時にまた地名の「軽」と「雁」をかけて「天飛ぶ雁」の意を含めたものと解されているが、いずれにしてもそこには「天飛ぶ鳥」に想いを託した古き代の思念が潜在していることを考えないわけにはいかない。記紀の神代巻には、天若日子の葬儀に、

其処に喪屋を作りて、河雁を岐佐理持とし、鶯を掃持とし、翠鳥を御  
食人とし、雀を確女とし、雉子を哭女とし、かく行ひ定めて、日八日  
夜八夜を遊びたりき。  
(古事記)

のように多くの鳥たちが奉仕した話を伝え、死霊と鳥との密接な関係を暗示しているが、特に、鳥が靈魂を運び、あるいは靈魂が化して鳥となるという蒼古の信仰は、倭建命の死後の霊が「八尋白智鳥」となって天

翔けたという伝承(古事記)や、姫神が鳥と化したという話(出雲国風土記)、白鳥が童女になったという物語(常陸国風土記)などに美しく昇華して、明らかに白鳥処女説話の系統に繋がるべき姿を見せている。

ここに八尋白智鳥になりて、天翔りて、浜に向きて飛びいでます。  
(中略) かれその国より飛び翔りいでまして、河内の国の志幾に留まりたまひき。かれ其地に御陵を作りて、鎮まりまさしめき。すなはちその御陵に名づけて白鳥の御陵といふ。然れどもまた其地より更に天翔りて飛びいでましき。  
(古事記 中巻)

郡の北三十里にして白鳥の里あり。古老の曰へらく。伊久米の天皇の世に、白鳥あり。天より飛び来て、皇女と化はりて、夕に上り、朝に下る。石を摘みて池を造るに、其の堤を築かむとして徒に日月を積みて、築けども築き壞えて作成すことを得ず。童女等唱ひて曰ひけらく、

白鳥の 羽が 堤を つつむとも  
あらふまもうきはこえ

かく口口に歌を唱ひて、天に昇りて復降り来ざりき。是に由りて、その所を白鳥の郷と号く。  
(常陸国風土記 鹿島郡)

法吉の郷、郡家の正西一十四里二百三十歩。神魂の命の御子宇武賀比比売の命、法吉鳥と化りて飛び度りてこの処に静り坐しき。故、法吉といふ。  
(出雲国風土記 嶋根郡)

このような、鳥が靈魂の化したものという古き伝承の残照は、そのまま、異郷とこの世の間を通うという「常世の雁」の理念となって、源氏

物語の中にまで生き残っている。

心から常世をすてて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな  
常世いでて旅の空なるかりがねもつらにおくれぬほどぞなぐさむ

(源氏物語 須磨)

これらについて折口信夫博士は夙に、

雁をとこよの鳥としたことは、海のアナタから時を定めて渡り来る鳥だからである。同じ意味に於て、更に神聖な牲料なる鶴ツルは、白鳥と呼ばれて常世の鳥と考へられたのは固より、霊を持ち搬び、時としては、人間身を表す事の出来るものとせられた。  
(国文学の発生)

鳥ことに水鳥は、靈魂の具象した姿だと信じたこともある。又、其運搬者だとも考へられた。而も魂の一の寓りとも思つて居た。(中略)  
鶴・鶴・雁・鷺など、古代から近代に亘つて、霊の鳥の種類は数多い。殊に鶴と雁とは、寿福の楽土なる常世国の鳥として著れてゐた。

(万葉集研究)

と説かれたが、こういう系列をさらに断続的にたどるなら、たとえば、ほととぎす鳴きしすなはち君が家に行けと追ひしは到りけむかも

(万葉集 卷八)

ふる里の奈良思の丘のほととぎす言告げやりしいかに告げきや

(同 卷八)

旅人のやどりせむ野に霜降らば吾が子はぐくめあめのたづむら

(同 卷九)

雁がねは使に来むとさわぐらむ秋風寒みその河の辺に

「雲の使」と「鳥の使」と

(同 卷十七)

常陸さし行かむ雁もがわが恋を記してつけて妹に知らせむ

(同 卷二十)

あるいは、

雁がねは風にきほひてすぐれどもわが待つ人のことづてもなし

(新古今集 卷五)

北へゆく雁のつばさにことづてよ雲のうはがきかきたへずして

(同 卷九)

など、その情緒や構想の違いはあれ、いずれもこの系譜の中に包含さるべき一連の歌と言ふことができよう。それは前述したように、外来の蘇武雁信の故事の影響などに潤色されつともなお、柳田国男博士が指摘されたように、

空から来る故に遠い国の使と解し、もしくは亡き人人の仮の姿とも見たので、それ故に「前生は人」といふ昔話が、数多く生れたのである。  
(野鳥雑記)

という古朴な想憶の流れにほかならなかつたのである。

## 五、流人の歌

冒頭にあげた「天飛ぶ鳥も使ぞ鶴の音が聞えむ時はわが名問はさね」という古事記歌謡は、次の二つの点において実に暗示的な要素を内包しており、その意味では、わが文学史上における最初の「流人の歌」としての典型を示していると言えよう。即ち、この歌で注意したいのは、①

まず「天飛ぶ鳥も使ぞ」と呼びかけ、ついで「わが名問はさね」と願望する一つの「型」を持っていることである。そしてさらに、この歌のもう一つの重要な特徴は、②遠流（または遠旅）の歌と「鳥（またはその他の媒体）」との関係を象徴的に示しているということなのである。

つまり、この二つの要素がそれ以後の「流人の歌」の基本的な定型のようになってゆく傾向が見られるのであるが、それにつけてすぐ連想されるのが有名な、

名にしおはばいざ言問はむ都鳥わがおもふ人はありやなしやと

（古今集 卷九・伊勢物語）

の歌である。伊勢物語の中でこの「昔男」の東下りの部分は、ある種の配流の趣きをさえ見せているが、軽の太子は想いを鶴声に託し、須磨の源氏は行く雁に憧れ、在五中将は直接、都鳥に問いかけている。いずれも「鳥」を媒介としての流謫望郷のモチーフは相似である。時代が下るにつれて、それら発想の技巧も多岐となり、流人の想いを託すのは、時に風となり雲となり、また潮ともなった。

わたの原八十島かけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟

（古今集 卷九）

は、承和五年十二月、小野篁が隱岐国に流される時、出船に際して詠んだ歌。あるいは、

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ

（古今集 卷十八）

は在原行平の須磨での歌であり、昌泰四年正月、菅原道真が筑紫に遷さ

れる時の、

こちふかばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな（大鏡）  
の歌なども同系であり、さらには、

薩摩瀧沖の小島にわれありと親には告げよ八重の汐風（平家物語）

は、平清盛の怒りに触れて、俊寛らと共に鬼界ヶ島に流された平康頼の歌と伝えられている。また、承久三年、北条氏によって隱岐に遷幸された後鳥羽院は、

海すこし近ければ寄せくる波も音高く、梢を伝ふ嵐の声、御夢をだに  
結ばねば、いとど變世をわびしらに猿な鳴きそと悲しませ給へども、  
都に帰るつてもなし。  
（北条九代記 卷六）

という悲境の中で、

われこそは新島守よ沖の海の荒き波風心して吹け

と詠じ、同じ時、土佐からさらに阿波へと遷された土御門院は

浦々に寄する白浪言問はむおきのことこそ聞かまほしけれ（同）

と詠んだ。いずれも「流人の歌」の系列の中で考えられる代表的な歌歌であるが、そこに共通して流れる一つの特徴を、次に検討してみよう。

## 六、「呼びかけ——依託」の型

今、これまで考察してきた旅思の歌や配流の歌を通じて見られる共通の性格や類型から帰納して、そこからいわゆる「距離感」とその「媒介物」の関係と、さらにその表現形式の特色を探ってみよう。

これらの歌謡は、いずれも遠く離れ隔たったふるさとの知己肉親に対



して自分の鬱愁を伝えたいと願望しており、それにはまず、その遙かなる距たりを越えて、わが心を伝えわが想いを運んでくれる媒介物を求め、これに呼びかけて哀訴し依頼しまた命令する、という型が大きな特徴となっている。

軽の太子は「鶴」を「天飛ぶ使」と指定し、鶴声が聞こえたら自分の名を尋ねてくれ、と詠んでいるが、こういう型はむしろ古型であって、時代が下るにつれて、その媒介物つまり鳥なり雲なり風なりに直接呼びかける定型が決まってくるようである。

「いざ言問はむ都鳥」の在五中将がそうであり、「人には告げよ」と「あまの釣舟」に呼びかけた小野篁や、「親には告げよ」と八重の汐風に訴えた鬼界ヶ島の流人もまた然りである。「心して吹け」と荒き浪風に呼びかけた後鳥羽院の歌も、「寄する白浪言問はむ」とうたった土御門院の歌も例外ではない。そしてこの型は、

道の口 武生の国府に 我はありと 親に申したべ 心あひの風や  
さきむだちや (催馬楽 道の口)

などとほとんど同曲であり、さらに、

甲斐が嶺を嶺こし山こし吹く風を人にもがもや言伝てやらむ (風俗歌)

いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる波かな (後撰集)

忘れなん待つとな告げそなかなかいなばの山の嶺の秋風

(新古今集)

「雲の使」と「鳥の使」と

など、配流とは無関係ながら、遠路旅程の隔たりにもうたわれたタイプともなったようである。

こういう「流人の歌」に共通する「呼びかけ―依託」という性格は何を意味しているのだろうか。そもそも配流・流謫ということ、それは源氏物語の明石入道の言葉ではないが、「罪にあたることは、唐土にも我朝にも、かく世にすぐれ、何ごとにも人に殊になりぬる人の、必ずあることなり。(須磨)」というように、むしろ優なる貴人の資格の一つでさえあったと考えられるのであるが、そういう観点からすれば、これら流人の文学というものが、いわゆる「貴種流離譚」の一翼を形づくっていることと見ることができよう。「流され王」あるいは「貴種流離」という民俗学的見解は、柳田博士や折口博士によって展開されたのであるが、それはまた「流離の物語には、水辺の詠嘆が出て来てこそ、本格のものになる。(折口信夫全集「小説戯曲文学における物語要素」)」というように、後世に至るまで「配流」といい「遠島」といって、罪を得て放たれる地は必ず水にゆかりのあるところなのも特徴の一つである。それは実際の離島の場合でなくても、遠流の地はほとんど水辺や川の股や中州のような、必ず水に縁のある場所が多く、そして後世までそのことを「流される」と呼んだ。それは、葦舟に入れて流された「蛭子神」や「間なし勝間の小船」に乗って綿津見の神の宮に行った火遠理の命の、蒼溟の神の物語に始まる貴種流浪の発想の流れが生き続けていたからにはかならず、同時に、霊を運ぶと信じられた古き水辺の鳥たちのイメージともまた無縁ではない。そして、それら流離の貴人たちが、放浪の想いを詠じ

たと伝えられる謠中の詩歌から、わが国の「流人の文芸」は始まっていると言ふことができる。

このような視野に立つ時、貴種流離の想念と深く結びついた「流人の歌」の、その特質ともいふべき「呼びかけ—依託」の意義を解くことができる。ここで想起されるのが古事記に見える「雉子の鳴女」の物語である。高天原から葦原の中つ国に遣わされた天若日子がいつまでたっても復奏しないので、天照大御神と高御産巢日神はもろもろの神たちにその由を問い給うた。

是に諸々の神たち、また思金神答曰さく。雉子、名鳴女を遣はしてむ、とまをす時に詔りたまはく。汝行きて、天若日子に問はむ状は、汝を葦原中国に使はせる所以は、その国の荒振神等を言むけ和せとなり、なぞ八年に至るまで復奏さざる、と問へ、と詔りたまひき。

(古事記 上巻)

この『汝行きて……と問へ』という神託の型こそ「鳥の使」の古き祖型、そして「とこよの鳥」の性格をありのままに物語っているものではないだろうか。流人の歌の「鳥の使」という要素と「呼びかけ—依託」の性格が、期せずしてここでステレオスコープを見るようにびったりと重なり合うのである。軽の太子が想いを託した天飛ぶ鶴も、在五中将が呼びかけた都鳥も、そして源氏が須磨で詠んだ雁がねも、みな、この「雉子の鳴女」の後裔にほかならない。それは、古く神の意思を伝え常世の霊を運ぶ「天飛ぶ使」であり、やがて、さすらいの貴人のあくがる魂を託すものとなり、しだいに「み空ゆく雲も使と人は言へど…」のよう

に、空渡る雲や風に同化し変形して文学的に臙化したにせよ、なお、後の世までも、遠い距離感に底礎されつつ、貴き流人たちの想いを運ぶ文芸として、さらには客愁を託す旅情の詞章として、一つの定型を保ち伝えてきたのであった。

## 七、雲と鳥の占ト

最後に、これら「雲」と「鳥」とに関する古き占トについて一考してみよう。前述したように、雲や煙は、古くこの世と常世とを結ぶ媒介物であり、それはまた、霊魂を運ぶものと考えられたことが明らかであるが、今に残る魂迎への行事における迎え火や送り火の習俗なども、これらと離して考えることはできない。民俗学では夙に、盆の門火と左義長の関連が注目されたが、雨乞いに火を焚き、盆や正月に柱松を燃すことや、西京の左右大文字や愛宕の鳥居火など、今も各地に残るこれらの行事が、古い火の信仰に伴う「火祭り」の流裔であって、そこに立ち昇る「煙」の効果も重視されていたと考えられるふしがある。たとえば、千駄焚きなどが一名「雲焼き」「雲アブリ」とも呼ばれることや、左義長で灰や火の粉が高く舞い上るのを喜ぶことや、火勢や煙の方向などによって年占をする習わしがあること(民俗学辞典)など、みな、「火」とともにそこに立つ「煙」の要素が無視できないものになっているのであるが、これらの火祭りにおいて、煙の立ち方や流れる方角によって「年占」をするという信仰のその祖型的なものを、古き「国見」の伝承に見出すことができよう。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見を  
すれば 国原は煙立ち立つ 海原は鷗立ち立つ うまし国ぞ あきつ  
しま大和の国は (万葉集 卷二)

このような「国見—国讚め」の行事には、年占を背景とした「煙」の要素が二重写しになっている印象がかなり濃厚であるが、遙かなる煙のたがずまいを遠望して形勢を占ったという記録はほかに数多い。

古き伝にいへらく。大足日子の天皇、下総の国印波の鳥見の丘に登り  
まして、留連ひて遙望しまし、東を顧て、侍臣に勅したまひしく、  
「海は即ち青波活行ひ、陸は是、丹霞空朦けり。国は其中より朕が目  
に見ゆ」とのりたまひき。時の人、是に由りて、霞の郷と謂へり。

(常陸国風土記)

(健甕間命) 軍士を引率て、行く、凶猾を略け、安藝の島に頓宿りて  
海の東の浦を遙望す時に、烟見えければ、交、人やあると疑ひき。健  
甕間命、天を仰ぎて誓ひていはく、「若し、天人の煙ならば、来て我  
が上を覆へ。若し荒ぶる賊の烟ならば、去りて海中に靡け」といふ時  
に、烟、海を射して流れき。爰に自ら凶賊ありと知りぬ。

(同)

昔者、同じき天皇(景行天皇)、巡り幸しし時、志式島の行宮に在し  
て、西の海を御覽ずに、海の中に嶋あり。烟氣多に覆へりき。陪従、  
阿曇連百足に勅せて察しめたまひき。(中略)第一の嶋は名は小近、土  
蜘蛛大耳居み、第二の嶋は名は大近、土蜘蛛垂耳居めり。

(肥前国風土記)

「雲の使」と「鳥の使」と

神代直、奏ししく、「彼の烟の起てる村は猶、治を被らず」とまをし  
き。即て、直に勅せて、此の村に遣りたまふに、土蜘蛛ありき。名を  
浮穴沫媛といひき。(同)

あるいはまた、  
数日還之曰、西北有山、帶雲横紐、蓋有国乎、爰卜吉日、而臨發有日。  
など、いずれも雲煙のさまを遠望して情勢判断の資料にした印象が鮮明  
である。そしてさらに、

(日本書紀 卷九)

ここに天皇、高山に登りて、四方の国を見たまひて、詔りたまひしく  
「国中に烟たたず、国みな貧し。かれ今より三年に至るまで、悉に人  
民の課役を除せ」とのりたまひき。(古事記 下巻)

という仁徳帝の「望烟」の伝承等を透かして、国見の行事の一環として  
の「煙」に関する占卜らしき呪儀が浮かび上がってくるのであり、さら  
には、

(古事記)

はしけやし 我家の方よ 雲居立ち来も  
のような、単なる望郷の片歌とのみは思えぬ何かの予感に満ちているよ  
うな余韻などから、「煙占」または「雲占」というような古き幻の習俗  
をすくい上げることができる。

ともあれ、「慶雲爛兮。糺纒纒兮。(十八史略)」と聖天子の出現を尋  
いだ古き大陸の賀詞の伝承を始めとして、古来、瑞雲と仰ぎ妖雲と怖れ  
て、折折の天象地文に結びつけ、まじない占断した事例はあまりにも数  
多い。そして、前にも触れたように、古き人人にとっては、元来、雲も

煙も霞も露も、さして違いはなかったかのようである。それだから、

久方の天の香具山この夕べ霞たなびく春立つらしも (万葉集 卷十)

冬すぎて春来るらし朝日さす春日の山に霞たなびく (同)

春日野に煙立つ見ゆおとめらし春野の菟芽子採みて煮らしも

(同)

などのように、国見や眺望の歌に雲や霞が扱われるのが、やがて遠望の叙景の定型のようになってくるのであるが、それらの発想の底に流れる古き信仰と習俗のなごりを透視することができるのである。

一方、「鳥」についても古き占卜の想念がまつわっている。鳥の鳴き声や影や色彩を見て吉凶を判ずるいわゆる「鳥占」の習俗は、今もなお各地に残っているが、その明瞭な古型がやはり前述の「雉子鳴女」の伝承の中に見られるのは決して偶然ではない。

かれ、ここに鳴女、天より降り到りて、天若日子が門なる湯津柱の上に居て、まつぶさに天つ神の詔命のごと言ひき。ここに天の佐具売、この鳥の言ふことを聞きて、天若日子に語りて、「この鳥はその鳴く音いと悪し。かれみづから射たまへ」と言ひ進めければ、天若日子、天つ神の賜へる天の波士弓天の加久矢をもちて、その雉子を射殺しつ。

(古事記 上卷)

この「天の佐具売」とは、占卜を司る巫女で、鳥の鳴声などで吉凶を判断したのであろうと考えられているが、ここには、神の使である鳥の鳴き声を占ったという古き「鳥占」の様相が、まさに疑う余地なく伝えられている。また、天岩戸の前で天照大御神の出現を祈って鳴かせたとい

う「常世の長鳴鳥」の神話や、八千矛の神の物語に伝えられる、

(前略)

麤子の寝すや板戸を

押そぶらひ吾が立たせれば

引こづらひ吾が立たせれば

青山に鶉は鳴きぬ

さ野つ鳥 雉子はとよむ

庭つ鳥 鶏は鳴く

うれたくも 鳴くなる鳥か

この鳥もうち止めこせぬ

いしたふや あまはせつかひ

ことの語りごとも こをば

の歌謡や、さらに、

からすとふ大をそ鳥のまさでも来まさぬ君を児ろ来とぞ鳴く

(万葉集 卷十四)

の歌など、いづれも、鳥の鳴き声を忌諱したり期待したりして、事の成り行きを占った印象が明確であるが、このような「鳥の占卜」の残影は、さまざまな形をとりつつ、後世の鳥に関する文芸の中に深くひそかな影響を及ぼし続けていると言えよう。今でも、「小鳥が家に迷い込んできると吉いことがある」と喜ぶ風習が残っている反面、「鳥を霊あるもの、又は不幸の警告者と見る例(野鳥雑記)」も多い。

ここで、先に触れた「国見」の歌をもう一度思い出してみよう。「…

(古事記 上卷)

登り立ち国見をすれば、国原は煙立ち立つ、海原は鷗立ち立つ……」というこの「煙」と「鷗」の対句の何と暗示的なことか。国見の行事に年占的な色彩が濃厚である以上、そしてこれまでのさまざまな考察を漉して見る時、ここに詠まれた「雲（煙）」と「鳥」の素材もまた、占卜的な媒体として相互に無関係ではあり得ない。これを単なる遠望の叙景における偶然の対句とのみ片づけてしまうの方がむしろ不自然であろう。

## 八、むすび

こうして、雲を詠じ鳥をうたった無数の文芸が、いかに古来の芸能や民俗を多彩に裏づけていることか。それは後世的屈折や醜化を伴いながらも、なお古代の呪的な想念の余韻を保ち続けているのである。

とまれ、「雲」や「鳥」は、古代人の精神生活の世界において、またその抒情のジャンルにおいて、重要な実在であった。それはまた、見遙かす蒼穹の虚無の中にあつて、自在に漂泊し飛翔し去来しつつ、その虚空の広がりを具象する実存でもあつた。あてどない手ごたえのない虚しい無涯の空間よりも、現実に目で確かめられ、うつつに動くものであつた。「天雲もいゆき憚り、飛ぶ鳥も翔び上らず……」（万葉集 卷三）とか、「雲散鳥没」などという相似のイメージによって象徴された距離感とそして神秘感が、未知と郷愁と憧憬を綯いませながら、これら「雲」や「煙」やそして「鳥」に託されたのはまた当然でもあつた。

それゆえに、「天飛ぶ鳥も使ぞ」「み空ゆく雲も使と」のように、そ

「雲の使」と「鳥の使」と

これらの雲や鳥は、果てしない距たりを越える「使者」として考えられ、ただに地上での隔たりのみならず、この世ならぬ異郷との隔絶を超えて、霊的世界に通う使者とも想念されたのであつた。それは、「常世」との交流を考えるうえにせひとも必要な媒介物（インターミディヤリ）でもあつたわけである。こうして形而下の世界の距離感を超えて、われわれの祖たちの豊かな空想力とナイーブな信仰心は、その想いを「鳥」に託し「雲」に乗せて、古く尚きロマンの時空世界を鮮やかに処理しつくしたのであつた。